連載⑯

内海善雄（ITU前事務総局長）の やぶ睨み「ネット社会」論

我が故郷は意外と豊かであった

連休中に故郷の讃岐富士に登って、我が郷土を一望し、その発展ぶりに目を見張った。

讃岐富士より見えた故郷の大発展

讃岐富士（飯野山＝いいのやま）は、讃岐平野のほぼ中央に位置し、孤峰なのでどこからでも見える。形が美しいだけではなく、見晴らしが良いことでも地元では有名である。新百名山にも名を連ねている。

バスの便が少ないので、坂出駅からレンタ・サイクルで小一時間かけて麓まで行った。自転車を使ったお蔭で、思わぬことがよく分かった。まず、道路が立派なことである。東京なら幹線道路になるほどの歩道のある道路が何本もあるが、車はまばらで、自転車がすいすいと走れる。

横道へ入ると田んぼがあり、どの畦道も普通車が通れるほどの幅で、きれいに舗装されている。田と田を仕切る土手も、水路も、すべてコンクリートで固められ、まるで工場の中に狭い実験農地があるような風景である。何故にこれほどまでもコンクリートで埋め尽くさなければならないのだろうか。

農家は、立派な門構えの豪邸である。しかも、同じ敷地に二、三棟ある屋敷もある。そのような豪邸が、軒を連ねるように多数あるが、一体この住民たちは、どこの田んぼで農業をしているのだろうか。

山頂近くの見晴らし台から下界を眺めると、これまた驚きである。遥かに瀬戸大橋と臨海工業地帯、そして近くは、住宅やショッピンセンター、また、運動センター、学校などの公共施設や道路などで埋め尽くされ、ほとんど農地がなくなっているではないか。

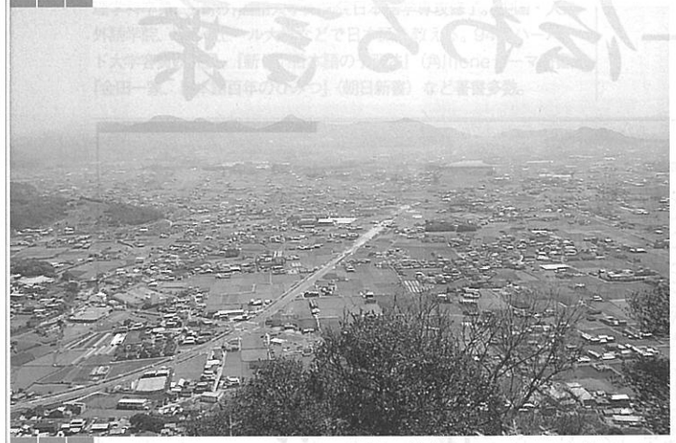
この地域は、讃岐三白（綿花、砂糖、塩）と称された産業の地である。三白の一つは、古くは綿花、筆者が子供の頃には、米を指すようになっていて、見渡す限り水田であった。弘法大師が建設した満濃の池をはじめとする一万五千もあるため池で灌漑している。

それが、ここ二、三十年の間にこれだけの大変貌を遂げたのだ。このまま無秩序な開発が進めば、まもなく、ほとんど緑のないところになるだろう。

スイスやフランスを相当くまなく走り回ったが、大都会といえども郊外へ行けば広大な農地があり、農村地帯が家や施設などで無秩序に蚕食されたところは見たことがない。西欧では、今も大地主が農業を営んでいるが、日本では戦後の農地解放で農地の所有が細分化されたため、このようなことが起きたのではないだろうか。農地の蚕食を防ぐには、強大な権限によるゾーニング（地域割り）計画が必要だと思う。

ところで、眼下の地域（丸亀市、坂出市、琴平町、まんのう町）は過疎地である。丸亀市や坂出市は、臨海工業地帯が控えているため、市全体としては過疎地域指定を免れているが、琴平町とまんのう町は過疎地域に指定されている。

香川県は人口が減少し、人材が県外へ流出している。筆者を含め高校の友人の半数は県外で活躍している。空家率は一七・二％で、全国四位である。このような統計数字を見ると立派な過疎地だが、山上からの景色は、とてもそうは見えず、故郷の大発展に驚愕するばかりである。



まんのう町、琴平町方面は過疎地域に指定されているのだが……

「地方の疲弊」への疑問

少し自転車で走り、山頂から眺めただけの印象に過ぎないが、昨今メディアでいわれている「地方の疲弊」という認識に多くの疑問が湧いてくる。

第一に、地方のシャッター街が喧伝され、疲弊のシンボルとして扱われているが、本当に買い物をする商店もなくなっているのだろうか。地域では、大型ショッピングセンターがいくつも開設され、極めて隆盛である。レンタ・サイクルをした坂出駅前商店街もご多分に漏れずシャッター街だが、駅に隣接した大型ショッピングセンターは繁盛していた。これは、地方の疲弊ではなく、流通革命であり、小売業の構造変革と認識するべきではないのだろうか。

第二に、そもそも地方は疲弊しているのだろうか。それは、所得面の経済活動指標のみを見ていて、低コスト面や好自然環境など統計数字には出にくいものを看過していないだろうか。県外に出た者たちよりも、県内に残った友人のほうがますます豊かな生活をしているのが昨今の実感である。

第三に、農業への過大な補助への批判は、まだまだ寛大過ぎないだろうか。自転車で走った地域では、専業農家になれるだけの土地がなく、農業はいわばほんのアルバイトに過ぎないと思われる。そこに、無駄を通り越し、機械使用を考えても、集約化を考えても、はたまた、自然環境を考えても信じられないコンクリート漬けがなされている。

第四に、どこへ行っても公民館や○○センターが目につくが、利用者の少ないお決まりの福祉施設の建設にも疑問が湧く。山や川、森や林も、立派な公共施設であり公共財産である。自然を破壊して使われない施設を建設するぐらいなら、豊かな自然を活用し、全国民が利用できる保養施設など観光産業の起爆剤になるようなものがよほど地元民にも有益だと思う。

新百名山に選ばれるほどの讃岐富士という資源も、公共交通機関は皆無に近く、また、登山口への標識や案内パンフレットなども見当たらず、活用されているとは言い難い。長く滞在したスイスではとても考えられないことだ。

求められる既成観念からの脱却

過疎化や高齢化で地方は疲弊していると決めつけるのは誤りではないか。実は、地方、少なくとも我が故郷は豊かであり、人知れず静かに発展してきているのだ。現に、廃業した塩田は「番の州臨海工業地帯」となり、農地は確実に他の用途に使われてきている。

地方の豊かさや可能性が意識されれば、人口流出も減るだろう。あまりにも農業だけに傾注したため見過ごされていた新しい産業に、農業補助の一部を廻せば、雇用機会の拡大も期待できるだろう。

今、必要なことは、既成観念と既得権グループからの脱却ではないか。

内海善雄（うつみ よしお）

1942年香川県高松市生まれ。東大法学部卒。東芝を経て66年郵政省（現総務省）入省。電気通信の自由化など、通信放送政策を長く担当。98年国際電気通信連合（ＩＴＵ）事務総局長就任。現在は一般財団法人「海外通信・放送コンサルティング協力」理事長。ＩＥＥＥ名誉会員。